

フランスで見たカトリシズムの今

第12回ワールド・ユース・デイ から考える

矛盾の森を巨木が覆う
——ジャック・マルタン神父——

第12回ワールド・ユース・デイ（カトリック世界青年大会）は、一九九七年八月十九日から二十四日までフランスを舞台に繰り広げられた。わたしはこの国際的な集會に東京管区グループのコーディネーターとして参加した。ここではその報告を兼ねて、百万人の人間を動員した、この「出来事」の意義を宗教的、政治的、社会的側面から考察してみたい。



西山教行

ワールド・ユース・デイの経緯

国連は一九八五年に「世界青年の年」を宣言した。これに呼応して、教皇ヨハネ・パウロ二世が、その年の枝の主日にあたり、世界中の若者に向けてローマに集まるよう呼びかけたことからワールド・ユース・デイは始まる。

その後、世界各地で二年ごとに催され、一九八七年：ブエノス・アイレス（アルゼンチン、九十万参加）、一九八九年：サンティアゴ・デ・コンポステラ（スペイン、五十万人参加）、一九九一年：チェストコーヴァ（ポーランド、百万参加）、一九九三年：デンバー（アメリカ合衆国、三十万人参加）、一九九五年：マニラ（フィリピン、三百万参加）と世界各地を経て、今回のパリへ至ったわけである。

それぞれの大会は聖書の一句をテーマとし、今回は「『ラビ』先生という意味—どこに泊まっておられるのですか』—と言うと、イエスは『来なさい。そうすれば分かる』と言われた」（ヨハネ1:38-39）の聖句が選ばれ、この御言葉は旗やポスターなどの形でパリ市

内の各所を照らしていた。

今回は、世界百六十カ国から若者がおよそ三十万人結集し、最終日には予想以上のフランス人参加者を迎え、全体で百万人と、その規模は非政治的集會としてフランスで戦後最大のものになった。

フランス国外からの三十万人の参加者の中には、日本のように、フランスへ行くためにビザも要求されず、参加費用も決して支払えない額ではない国からの参加者もあれば、アフリカ・アジア・中近東諸国からのように、移民労働者の入国を制限するためにとられた煩雑な法的手続きを踏まざるを得ず、さらにその費用も母国の生活レベルからは考えられないほど高額な「南国」からの参加者も多く見られ、教皇の呼びかけに答えること自体に大きな犠牲を払わざるを得ない現実

に直面する。それにしても、民族・言語・文化の壁を越えて、世界中からこれほどの若者が集まったという点においては、まさにカトリックがカトリックII普遍的であることを例証しているといえよう。日本のようにカトリックが極端なまでに少数派の国の信徒にとつて、信仰の広がりや「発見する」絶好の機会であり、さらにはそ

の「信仰の一致を見る」機会であったといえよう。今回の総予算は五十億円といわれており、これを支援する青年ボランティアは、主に教会の従来のネットワーク、すなわちボーイスカウト、学生センター、伝統的な運動などが中心で八千人を上回った。

この数字は何を表しているのか。ここで現代フランス社会における若者の宗教意識を簡単に振り返り、これだけの若者の動員が例外的であったことを示してみたい。

フランス社会におけるカトリックの位置

フランスは、四九六年、クロヴィスの洗礼をもってキリスト教を「国教」とした最初の国であり、歴代の王家の支援により、また幾多の聖人が輩出することにより「教会の長女」を自負してきたが、フランス大革命、さらには一九〇五年の政教分離法により、キリスト教を国家から正式に排除した最初の国でもある。そして、現代のフランスはヨーロッパで最も脱キリスト教化が進んだ国だといわれている。一九六七年にはまだ八一%の若者が神を信じていたが、一九六八年

のいわゆる「五月革命」以降、この脱キリスト教化は加速度的に進み、現在は神を信じる若者が四六%と半減し、さらにカトリックであるとの自己認識をもっている若者は三七%にすぎない（ル・モンド紙一九九七年八月二十日による）。

この中でも、どれだけ若者が定期的に主日のミサにあずかっているのだろうか。それはカトリック全体の実践率一五%という数字を下回るのではないだろうか。ちなみに、現在、定期的の日曜日のミサにあずかる十八〜二十五歳の若者人口はその世代全体の二%を数えるにすぎない（この意味で、八千人を上回るボランティアを確保し、七十万人のフランス人の若者を動員したことは奇跡的ともいえよう。当初、主催者側は三十三〜四十万人の参加を見込んでいたにすぎなかった）。

このようにカトリックが低迷している原因の一つは、宗教心そのものの衰えという以上に、フランス人の教会観にある。人口避妊など道徳・家庭問題に対するバチカンの断言的な教説から、教会を制度、おきて、制約ととらえるフランス人は多い。

それでも、キリスト教が人々の共感を得ている領域があるとすれば、それはとりわけ葬儀に関してである。

葬儀を教会で行いたいというフランス人は国民の四分の三に上り、死後の世界に対する関心と人間らしい死を迎えたいという気持ちは決してなくなつたわけではない。

このような状況の中で、百万人規模の集会を催したという事実には、これまでの宗教実践とは異なる方向性が兆しているのではないだろうか。

ワールド・ユース・デイの宗教的意義

ここでワールド・ユース・デイの宗教的意義を、主要な行事に沿いながら概観してみたい。

ヨハネ・パウロ二世にとって、今回は七回目の訪仏で、フランスは母国ポーランドとならび最多の訪問国である。故国の訪問が一番多いのは当然としても、教皇はなぜこれほどまでにフランスに執着するのだろうか。

ヨハネ・パウロ二世は、一九八〇年の第一回フランス訪問の際に、フランス共和国の国是「自由・平等・博愛」をキリスト教的な価値観であると位置づけることにより、フランスを非宗教的な国家からキリスト教

的な国家へと転換したいという再福音化の展望を明らかにした。そしてこの再福音化の戦略は、今回のワールド・ユース・デイにおいて、フランスを人権の国であるとともに聖人の国であるとアピールすることによって、一層強く表されたのではないか。ヨハネ・パウロ二世にとって、人権を守ることは教会の大切な務めであり、聖人の顕彰は教皇の好むところである。

さて、教皇のパリ訪問はトロカデロにある人権の広場から始まった。この広場は第二次大戦後、強制収容所から生還したミシェル・リケ神父が収容服のままミサをささげ、一九四八年には、後にノーベル賞を受賞する法律家ルネ・カサンが世界人権宣言を公布し、さらに一九八七年には「貧困と第四世界を支援する運動」を展開し、貧しい人々の人権のために戦ったジョゼフ・ヴレジンスキー神父が十万人の群衆の前に、「人間が悲惨な状態で生きざるを得ないところでは、人権が侵害されている。人権を尊重させるために集うのは神聖なる務めだ」との宣言文を読むなど、人権擁護の象徴的空間として知られている。

教皇によるこの広場の訪問は、ワールド・ユース・デイが人権擁護に対し積極的な関心を払っていること

を示すと同時に、これらフランス人司祭などの業績をたたえることを通じて、人権を擁護する召命をもつ国家フランスを強く賞賛するものといえよう。

「キリスト教国」フランスを称揚する教皇の強い意志は、フレデリック・オザナムの列福、小ききイエズスのテレーズ（テレジア）の事実上の教会博士宣言によっても示された。

ソルボンヌ大学教授フレデリック・オザナム（一八一三―一八五三年）は、サン・ヴァンサン・ド・ポール会を設立し、十九世紀の貧困問題に取り組み、労働者の権利の擁護に努めた信徒である。このカトリック知識人はキリスト教徒の立場から、当時ないがしろにされていた社会正義の問題に取り組んだ。

このオザナムの列福には、今まであまり知られることなく眠っていたフランスの知的・靈的伝統を覚醒する意図がある。それもバチカンではなく、ワールド・ユース・デイの枠内での例外的な列福は、模範なき現代社会を生きざるを得ない若者にカトリックのモデルを示そうとの戦略の現れではないか。

四十歳で亡くなったオザナム、信徒として社会にとどまりながら福音を生き、結婚をし一児の父として幸

福な家庭生活を送り、キリストを愛するように貧しき人々にかかわり、彼らを愛した一人のフランス人。超

自然的な聖徳を積んだ聖人とはタイプの異なるオザナムの存在は、このような点で現代の若者へのメッセージになるのだ。

小ききイエズスのテレーズの教会博士宣言も同じく現代の若者へのメッセージである。開会ミサにあたりテリユステイジェ枢機卿は、愛を極限に至るまで生きた十九世紀末の少女テレーズを参加者の友人の一人のように位置づけることにより、二十世紀末を生きる若者にオザナムとは異なるキリスト者のモデルを掲げ、愛の召命を高らかに歌い上げた。

このようにしてフランスを人権擁護の国、聖人の国として賞賛する教皇の試みは成功を収めたといえよう。しかし一方で、第二バチカン公会議で活躍し、教会を現代社会へと開いたフランス人神学者コンガール・ジュニユ、リュバックなどが一切喚起されないのはなぜだろうか。この知的・靈的伝統も、オザナムと同等、あるいはそれ以上に堅固で重要なはずだが、あえて歴史の片隅へ閉じこめることにより、第二バチカン公会議の成果をも歴史的遺産とするのだろうか。

ワールド・ユース・デイの中核が教皇ミサであることに相違ないが、それに先立ち多彩な行事が催された。

八月二十、二十一、二十二日の三日間の午前中は参加者の言語別に司教みずからカテキスムを行い、その言語グループは二十六に達した。

中でも、ミラノのマルティニ司教によるカテキスムは好評を呈したと伝えられている。このカテキスムがおおむね好評だった理由として、司教みずからが教えを説いた点があげられよう。地方教会の長たる司教が若者と直接に対話をする機会は実にまれである。とはいえ、三日間の宗教教育が信仰をはぐくむに十分なものは疑問は残る。

このほかの行事として、八月二十、二十一日の午後パリ各所の小教区や公共施設で繰り広げられた若者の祭典があげられる。これは各国代表団によるそれぞれの国の文化や、聖霊カリスマ運動を含めフランスのさまざまな運動を紹介する企画で、日本人参加者はパリ外国宣教会の中庭で行われた「アジアの教会を求めよ」という集まりに参加し、盆踊りなどを披露し、会場を訪れたフランス人などとの交流を深めた。

さらに、フランスらしい奇抜な企画として、三十六

キロに及ぶパリの環状道路を若者の輪で囲む「兄弟愛の輪」というイベントも土曜日の午前中に行われた。四十五万人の若者がパリの外周を取り囲む光景はおそらく史上始めてだったはずだ。参加者はパリ市内ではなく、反対の郊外へと身を向け、ベートーベンの歓喜の歌を口ずさみながら、隣人愛を世界へ向け発信した。

式典と祭儀が示したもの

次に、ワールド・ユース・デイの中心ともいえるべき祭儀について言及したい。

パリの大司教リユステイジェ枢機卿が司式をした開会ミサ、および翌日の教皇歓迎式典はエッフェル塔の足下のシャン・ド・マルス公園で、また教皇ミサはブローニユの森にあるロンシャン競馬場を改造して行われた。

その設計デザインに当たったのは、デュティリユールとウィルモットというフランス革命二百年祭のパレードをデザインした当代随一のデザイナー。この二人が公園や競馬場という世俗的な公共空間を神聖な空間へと変身させ、シャン・ド・マルス公園ではエコー



派遣ミサ (ロンシャン)

教皇ミサ・聖体拝領 (ロンシャン)



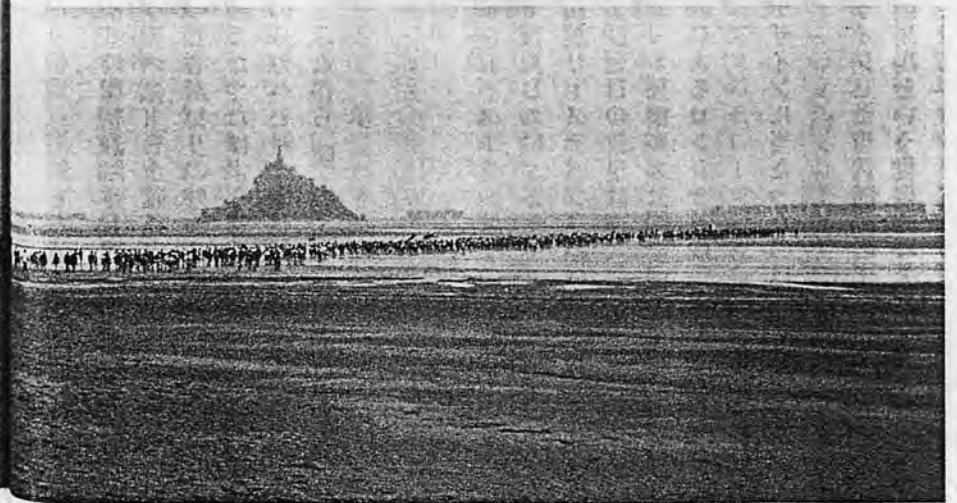
モン・サン・ミッシェル修道院へと歩いて海を渡る。現代のモーセ！
(ノルマンディ)



兄弟愛の輪 (パリ)



前夜祭 (ロンシャン)



ル・ミリテールを背景に祭壇とエッフェル塔が対面し、あたかも巡礼者の群れがエッフェル塔を伝って天に昇るように、またエッフェル塔は様式化された十字架であるかのように空に映えていた。

ロンシャン競馬場は新都心デファンスの高層建築を借景とし、両腕を開いたような円環構造を示す祭壇で、教皇を中心に戴けば、参列者すべてを招く最後の晩餐を思わせるものだった。そして祭壇中央に輝く光の十字架。祭壇後部の壁面を十字架の形にくりぬき、内部から光を浮かび上がらせるといふものだ。さらに日没後には会場に設置された幾つものサーチライトが夜空に交わることよって、ロンシャンは光のヴァーチャル・カテドラルへと変貌を遂げた。

デザインは秀逸は建築だけではない。デザイナーのカステルバジャックによる祭服は、神との契約を暗示する虹の色彩を様式化したもので、祭服の前後を垂直に虹の意匠が横断し、その明るい色合いは希望を感じさせるものだった。

典礼に移ろう。開会ミサは祭壇にテレーズの大きな肖像を掲げ、リュスティージェ枢機卿は説教の中でテレーズの聖人への願望を顕彰し、人間には不可能に映

秘跡と宣教の一面

前夜祭の中心は五大陸から選ばれた十人の若者の洗礼式、それに引き続く堅信式である。フランス、ロシア、ブルキナファソ、パレスチナ、カンボジア、香港、キューバ、ボリビア、アメリカなどから来た若者たちが教皇自らの手による洗礼の恵みに浴し、引き続き説教の中で教皇は洗礼の恵みの偉大さを強調された。参加者一人ひとりが洗礼の恵みを振り返り、受洗者とともに洗礼の恵みに一致する貴重なひとときであった。

と同時に、このような国際大会の中で洗礼・堅信の秘跡が個人を超えた象徴的価値をもつことも十分考えられる。その意味では、この人選が極めて「政治的」なものであることは一目瞭然だ。中でも、キューバ、香港（中国）は教皇の反目する共産主義が何らかの形で存続している地、ヨハネ・パウロ二世にとつて「未踏の地」であり、カトリックの世界的巻き返しを狙う教皇が是非とも訪れたい土地である。その意味でこれらの若者の洗礼は教皇の訪問の前触れともいえよう。また、ここでの受洗者が個人の資格と同時に、意識的であれ無意識的であれ、それぞれの国家の象徴として

る神の愛の呼びかけに答えるよう参加者の若者を鼓舞した。

また、今回の催しの異文化的広がりを典礼に表現するため、拝領の歌にモーリシャス、コモロ、ハワイ、マルティニークなどの民族音楽を交え、文化の多様性を尊重する意図が感じられた。

しかし、「南の国」の典礼文化を装飾程度に取り入れるという手法には、正直なところ、あまり感心しない。というのも、ともするとそれはヨーロッパ人の「エキゾティスム」を刺激するだけで、対等の立場での対話を促進しない恐れがあるからだ。

精神の支配・被支配の構造を越えて、文化の異なる人間が宗教心の表現において、どのようにすれば対等にかかわることができるのか、二十一世紀に共生する者の重要な課題である。

ロンシャン競馬場の前夜祭は、オープニング・コンサートにパリ・オペラ座の前指揮者ミヨン・ウォン・チャンを迎え、ヘンデル、メシアン、モーツァルト、シューベルト、ビゼー、ヴェルディなどの宗教曲を演奏し、宗教音楽の精髓を惜しみなく披露した。

作用し、その国家の秘跡化戦略をも暗示したのではないか。

ウラディミール大公の洗礼によりロシアのキリスト教化が始まり、またクロヴィスのそれはフランス王国を神へささげることにはほかならなかつたように、現代のキリスト教化戦略は国王といった権力者ではなく、下からの若者によって始まるというのだろうか。

とはいえ、秘跡化は必ずしもつねに福音化を意味しない。日本のように、受洗人口が極度に少ない国だからといって、秘跡化された人口の多い国と比べて、福音的価値がないがしろにされているとも断言できない。信者数のみが福音化された社会の基準であれば、日本はキリスト教的救いから最も遠い国になる。

しかし、秘跡化された社会が福音の実践に直結しないことは、歴史上の出来事だけではなく、近年ではアフリカ中央部にある、国民の七割がキリスト教徒のルワンダでの大虐殺を思い起こせばよいだろうし、さらにその惨劇に教会自らも手を染めた事実、すなわち教会がそこで虐殺の場となったことを思い起こすべきである。

このような点から考えると、国家への働きかけを暗

示するような秘跡化をここまで称揚する戦略に、わたしはためらいを感じざるを得ない。もちろん、秘跡がイエスとの出会いの成聖の恵みとして、個人に働くことになら異論はなく、むしろそれを積極的に受けとめているのが…。

歴史の偶然からか、この前夜祭の日が聖バルテルミー虐殺の日時と一致したことも秘跡化が福音化を完全に裏切った例証として指摘しておきたい。今回の大会からさかのぼること四百二十五年前、一五七二年八月二十三日の未明に、パリでは後に国王アンリ四世となるプロテスタントのアンリ・ド・ナヴァールとマルグリッドの婚礼に集まったプロテスタントをカトリックが大量に虐殺した。

ヨハネ・パウロ二世は、十六世紀のこの事件に言及し、「カトリックは福音が厳しく非難する行為を犯した」と過去の過ちを認め、プロテスタントに赦しを願った。これに対するプロテスタントの反応は極めて冷静なもので、この偶然をカトリックとの対立をおおる機会にすべきではないとの寛容なものであった。実際、隣国ともいべきアイルランドで、カトリックとプロテスタントとの対立が再燃の兆しのある現状を間近に

すると、宗派上の対立を挑発するような言動は慎むべきだと感じざるを得ない。

前夜祭の祭儀は、洗礼・堅信式の後に祈りと歌によって閉幕したが、途中で一人ひとりろうそくが手渡され、七十五万人の小さな光がロンシャンを銀河のように照らし出し、大群衆の中にも沈黙の内的なひとときを見つけることができた。

百万人の教皇ミサ

翌日は、百万人の参列者を迎えての教皇ミサ。とはいえ、そのうち二十五万人は競馬場に入りきれずに、外からミサにあずからざるを得なかった。この動員力は何よりも、テレビ・新聞といったマスメディアによるところが大きい。大会の始まる前後から、メディアは連日ワールド・ユース・デイを一面で報道し、祝祭気分はいやがうえにも高まっていた。

ヴァカンスも終盤に入り、避暑地などから帰省したフランス人も多かったのだが、それでも子どもにこの大会への参加をせがまれると、カトリック教会の善良性や伝統が幸いしたのだろうか、祖父母などが参加費

用を出したケースも少なからずあったようだ。

ワールド・ユース・デイの祭儀に関して最大の課題は言語ではないか。ホスト国がフランスという言語に関して自民族中心思想の強い国のためでもあるが、開会式、歓迎式、教皇ミサなどほぼすべての祭儀がフランス語で行われ、主要なヨーロッパ語はラジオを通じて同時通訳があったものの、それ以外のアジア、アフリカなどの言語については散発的にしか参照されなかった。キリスト教は本質的に「ことばの宗教」である以上そのメッセージ、その意味に全く近づけないのは、参加の意義が半減しようというものである。

確かに、これまでの歴史においてヨーロッパの教会の果たしてきた役割は無視できないが、二十一世紀のカトリック教会は少なくとも人口に関して、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの教会が主流になる。ところが、その言語文化は必ずしもヨーロッパ語と対等の資格で取り扱われたとは認めがたい。

文化は個人の尊厳にも深く結びついており、そのアイデンティティの根源は言語にある。むろん、とはいっても参加者すべての母語を対等に取り扱うことは、現実には理想にすぎないかもしれない。しかし、

ヨーロッパ語だけが特権的な地位を占めていることに、アジアの教会に連なる一員として危惧を感じざるを得ない。

おりしも、ヨーロッパの言語状況に関しては、多言語主義的思考が興隆を見せ、文化の異なる人間の交流に当たってはそれぞれの母語を最大限に尊重しようという気運が高まっている時代にあつて、教会がヨーロッパ語にのみ執着するのは時代に逆行していると思われても仕方がないし、バチカンがカトリックをヨーロッパの枠内でのみ考えているとの批判を受けよう。

〔つづく〕

(にしやま・のりゆき)



フランスで見たカトリシズムの今

第12回ワールド・ユース・デイ

から考える

矛盾の森を巨木が覆う

— ジャック・マルタン神父 —

前号に続き、昨年（八月十九日～二十四日）、パリで開かれた第12回ワールド・ユース・デイ（カトリック世界青年大会）の報告と考察を続けよう。

まず、この大会のメッセージおよびその宗教的・社会的次元での表象を振り返ってみよう。これまでのワールド・ユース・デイが「墮落した」思想や風俗に對して警鐘を発するという役割を担ってきたのに対し、今回は社会正義、とりわけ若者の失業問題に取り組み姿勢を示している。

西山教行



生きる意味への問いかけに對して

日本では、若者の失業はまださほど社会問題化していないが、ヨーロッパとりわけフランスでは政策の中心課題である。失業率二一・五%を数えるフランスで、十五～二十四歳の若者のそれは二六・三%に上り、また女性についてはそれよりもさらに厳しい状況にある（L'Etat de la France, 97-98, p.46）。

大学卒業後、ただちに失業保険をもらわざるを得ないケースも例外ではない。さらに、高卒以下で職業上の資格を持っていない若者の多くや、大都市郊外に暮らす移民の二世代の若者の半数以上が職にあぶれている。

このように適切な職を得ることができず、社会からの排除という日常を生きざるを得ない若者にとって、自分の生の意義や目標を探り当てるのは容易なことではない。教会は遅まきながら、このような若者の下からの声に耳を傾け、彼らの生きる意味を共に真剣に考えようとしている。もちろん、一回のワールド・ユース・デイが、一人ひとりの生の意義を模索する旅に

確な答えを提供することができるとは心もとない。しかし、少なくとも「先生、どこにいらっしやるのですか」に對するイエスの答え、「来て、見なさい」は若者に信頼と希望を回復させるのではないか。イエスは探究する若者に自分の住処（すまひ）だけを告げ知らせ、立ち去るのではない。イエスは「来なさい」と、尋ね求めるものを自らのもとに招く。

ところで、マスメディアの効果が絶大であったにせよ、なぜこのように多くの若者が集まったのだろうか。ただ一人の宗教的指導者の呼びかけで全世界から百万人の若者が集まったのであれば、その結集力は不気味なものと感じられよう。しかし、参加者は必ずしも教皇の存在だけにひきつけられたのではないようだ。

というのも、教皇の教説、とりわけ人工避妊の取り扱い、エイズとコンドームの関係などに對して、若者はそれらすべてを字義どおりに受けとめていないようだ。新聞記者の行ったインタビューを見ると、若者たちは参加の理由を、大会の祝祭的な雰囲気や兄弟愛・隣人愛を世界的レベルでグローバルに体験したい、実感したいからと述べている。

言い換えるならば、若者たちは世俗社会にはあまり

見られない紐帯の強いグローバルな共同体体験を望んでいるのだ。小説家のパスカル・ブリュックネールはその傾向を「原始キリスト教的」と形容しているが、言い得て妙である(ル・フィガロ紙一九九七年八月二十四日)。

共同体体験への志向性

このように強烈な共同体体験を志向する動きは、一九八八年のサンティアゴ・デ・コンポステラで催されたワールド・ユース・デイから始まったようだ。

イベリア半島の東端の聖ヤコブ殉教の地サンティアゴ・デ・コンポステラは、ヨーロッパのキリスト教宣教の原点である。この記念碑的な地でのワールド・ユース・デイの開催には、ヨーロッパの再キリスト教化の展望が見え隠れしていた。

この戦略に対応するかのようには、フランスではその翌年以降、国際レベルあるいは国内レベルの巡礼参加者の数が増大し、ポーランドで催されたワールド・ユース・デイの翌年には、フランスの伝統的巡礼の一つのシャルトル巡礼に参加する青年の数が倍増した。

バルな共同体の形成を進めているのではないか。

しかし、このような傾向がカトリックをイベント宗教、ひいてはパフォーマンス宗教に変質させる恐れはないだろうか。そこでは、日常の信仰の次元があまり問われていない。さらに、若者の中には大巡礼大会のみを「次々と渡り歩く」者もいる。

テゼの創立者のロジエは新聞のインタビュウに答えて、現在の傾向に危惧をもちしている(ル・モンド紙一九九七年八月二十日)。「若者を幻想に導かないよう気をつけなくてはならない。大集会が意味をもつのは、それが若者の日々の暮らしの中で信仰を生きる手助けとなる限りにおいてだ。大集会は人生の中での例外的なひとときになつてはならない」

これらの若者の一方で、ワールド・ユース・デイを全面的に支えている集団に、オプス・デイ、ネオ・カテキュメナテ、フォコラレといった共同体や、エマニユエル、シュマン・ヌフなどの聖霊カリスマ刷新運動がある。

このような教区や国を縦断している運動は概して教皇を熱烈に支持しており、教皇もそれに答えるかのようになつてこれらのグループを霊的・制度的に支援してい

いわば、イベントとしての巡礼がヨーロッパですっかり定着したのだから、その参加者は、奇妙なことには、必ずしも従来の意味での信仰の実践者とは限らない。むしろ参加者の多くは、主日のミサにほとんどあずかったことのない若者で、中には求道者も見られるようである。今までの大衆運動としての巡礼というパターンとは様相を違えている。

言い換えるならば、日曜日の教会のミサに若者はほとんど見られないにもかかわらず、シャルトル、ルルド、テゼ、パレル・モニアルといった大巡礼地は若者であふれかえっているのだ。この意味で、若者に宗教離れがあるとはいいたくない。若者たちは失業などのため社会の中で個別的な場を見つけられずに排除される傾向にあるため、かえって共同体的な場、世界中からの若者の集まるようなグローバルな空間、国際的な場へと向かうのではないか。

確かに、そのような高揚した雰囲気の中では、厳しい日常を離れて、兄弟愛や隣人愛をより身近に実感できるだろうし、自分自身が他者に受け入れられているとの思いも強く、自己に対する信頼を取り戻せるかもしれない。この点で、社会からの若者の排除がグロ

る。
聖霊カリスマ運動の一つ「ヴィ・エ・リュミエール」の創立者のダニエル・アンジュ神父は、ワールド・ユース・デイに関するインタビュウの中で、その参加運営に関して「聖霊カリスマ運動は霊的側面を担当し、教区はどちらかといえば文化面に展開する」と述べている(France catholique, n.2608)。

パリでの本大会に先立つブレ・プログラムとして、フランスの各教区は全体で十五万人の外国人を受け入れ、ホームステイさせ、各教区の豊かな文化遺産を知る行事を組んだ。

例えば、東京管区グループの受け入れ先のクータンス教区(フルマンディー地方)で、参加者は世界遺産モン・サン・ミッシェル修道院教会を見学したが、それは文化遺産であるのみならず、生きた霊的遺産でもある。

このように、文化遺産と霊的遺産が不可分に結びついていることも決して少なくない。ダニエル・アンジュ神父の述べるような区分けをいたずらに強調することは、教会の中にさらなる教会を生むことにもつながりかねない。

他宗派・他宗教への姿勢

ワールド・ユース・デイそのものの根幹にかかわる点、すなわちプロテスタントなどキリスト教諸宗派および他宗教との関連にはまだ触れていない。一言でいって、この集会にはエキクメニズムや他宗教に対する配慮が極度に欠落している。この他宗派、他宗教との関連は、大会がフランスで行われただけに、より慎重な態度が要求されたのではないか。

かつて「教会の長女」を自負したフランスは、制度としてのカトリックの低迷に直面しているとともに、国内の宗教地図は多様を極めている。

人口から見ると、カトリックの次に位置する宗教は移民の増加に伴いイスラムであり、ついでプロテスタント、ユダヤ教、正教会などとなっており、中でもフランス在住のムスリム（イスラム教徒）はモスクヘ定期的に通う人口が多く、その実践率はカトリックよりも高い。このようにフランス社会は宗教面でもモザイク模様を形成しているのだが、残念ながらワールド・ユース・デイがこのような現実を的確にとらえていた

喧伝していたため、その「カトリック性」が極めて曖昧なものになっていた。

このような戦略は現代社会が多様で多元的な価値観を目指しているのとは反対に、まるで中世のようにカトリックが支配する、それもヨーロッパのカトリックによる世界統合をも感じさせなかったか。この大会が二〇〇〇年の大聖年を目指した第一歩であるならば、そこにはカトリックだけではなく、あらゆる宗教、いや無宗教の人々とともに歩むべきではないか。パチカンはローマ教皇の旗印の下にあらゆる宗教、否人類が結集するとの幻想を生きているのだろうか。

フランス共和国の中での位置づけ

次に、このイベントとホスト国フランス共和国の関連に触れたい。

もはやフランスはポーランドやフィリピンのようなカトリック国とはいえないにもかかわらず、なぜこの大仕事を引き受けたのだろうか。「南の国」からの大量の若者にフランス本土への入国を認めることは、この大会以降、母国に直ちに戻らない残留者が出るとい

とはいいたい。

ル・モンド紙は大会期間中ワールド・ユース・デイ関連に連日数ページを割いていたが、その中で社会の多様な価値観に対応すべく、無神論者も含めて他宗教の若者に対するインタビュ記事に掲載していた。

インタビュに応じたほぼすべての若者は、カトリック教会に対して、他宗派、他宗教との対話を期待すると伝えていた。例えば、二十九歳のムスリムは、たとえフランス共和国が法的にいかなる宗教にも関与しないという原理に基づいているにしても、ムスリムから見たフランス社会は依然としてキリスト教社会に他ならず、その点イスラムが社会から排除されているとの印象を受けると証言している（ル・モンド紙一九九七年八月二十日）。

そもそも「ワールド・ユース・デイ」の名称そのものも、他宗派、他宗教との対話を促進する姿勢とはいいたい。これはあくまでもローマ・カトリック教会の主権する国際大会なのだが、その名称にはローマもなければ、カトリックも見当たらない。フランス語ではさらにワールド・ユース・デイ (Journées Mondiales de la Jeunesse) の頭文字をとってJMJとして

うリスクをも意味する。そのような治安上の問題を予期しながら、なぜフランスはパリ開催を引き受けたのだろうか。

フランスがホスト国を引き受けた理由は宗教的、政治的理由などさまざまな思惑が錯綜している。まず何よりも、フランスは自国が外国人受け入れの伝統のある国だとアピールしたかったのではないか。確かに、フランスは政治難民などを広く受け入れてきたことで知られている。しかし、この「寛大な」外国人受け入れの姿勢は、前年の移民政策と皮肉なことに対照的である。

前年の一九九六年八月二十三日には、パリのサン・ベルナル教会から「不法移民」が機動隊の手で強制的に排除されるという事件があった。

アフリカのマリ出身の労働者およびその家族は、移民労働者としてフランスで長く働いていたものの、「非合法的」に入国したために身分証明書、パスポートなどを持っていなかった。彼らは公共の住居を追われ、公共施設などを転々とした末に、パリ市内の移民が多く住む地区にあるサン・ベルナル教会に閉じこもり、滞在資格の正常化を求めた。これに対し、公権

力は強硬手段に訴えて、移民を排除し、その一部を強制帰国させたという事件である。

ちなみに、フランスで教会の建物自体は国家に属している。とはいえ、この事件に教会が何ら関与していないとはいえない。そして、この事件の一年後には、ワールド・ユース・デイの枠内で、多数のアフリカ人を含む外国人を「寛大に」受け入れたのであるから、歴史の皮肉とは恐ろしい。

また、文化国家としてのフランスをアピールしたいとの思惑も働いたに違いない。フランスは世界でも一位二位を争う観光大国であり、今回のイベントは教会の庇護の下でフランス文化のイメージの刷新を図る絶好の機会であった。

さらに、フランスの内政との関連で考えれば、共和国はこのイベントをフランス国内の統合に役立てたかったのではないか。ここ数年前から、フランス社会で最大の懸案となっているのは国家の統合である。

戦前、戦後と、植民地政策と連携するかたちでフランスは、旧植民地を中心に移民労働者を多く受け入れ、高度成長期において産業を振興してきたが、ここにきて経済危機と関連して「移民の流入に伴い」雇用問題

や治安の悪化が生じ、それが社会的弱者の排除あるいは若者の失業というかたちで社会問題化している。

そのため広義の社会資本や社会的既得権をめぐって「持つもの」と「持たざるもの」との間の乖離がはなはだしく、国家の分裂を懸念し、その統合を疑問視する声が強い。このような社会情勢の中で、今回のイベントがカトリシズムという伝統的価値観のもとに、国内世論を喚起し、国民の統合を計ることができたと思えば、これは「多少のリスクにも見合う」といえるのではないか。

フランス共和国は非宗教性を憲法で明記し、いかなる宗教をも優遇しないとする政教分離の国家だが、この大会においてこの原理は必ずしも遵守されなかった。むしろ、国家をあげての行事としてとらえていたようだ。

ワールド・ユース・デイ担当司教のデュボスト司教はそもそも軍隊付きの司教であり、その軍隊からは政府間連絡本部本部長として、かつてボスニアの国連監視軍を指揮していたモリヨン将軍を起用し、両者の連携により事業を遂行した。そしてヨハネ・パウロ二世に対しては、テロの犠牲になった国家元首であるとの

見地から、湾岸戦争並みの警備を当て、警察・軍隊といった国家権力を大幅に関与させた。

このような措置は共和国の原理にかなっていたのだろうか。実際その懸念は政府側からも伝えられた。

慣例に従い、教皇はフランスを出発する日に空港で政府首班のジョスパン首相の見送りを受けたが、プロ

テストメントのジョスパン首相はあいさつの中で、教皇の列福したオザナムに言及し、「教授資格者として、ソルボンヌ大学教授を務め、またジャーナリストでもあり、さらにサン・ヴァンサン・ド・ポール会の設立者でもあったオザナムは教会と共和国の和解に努めた。オザナムは、信教の自由を尊重し、良心の自由な



ミッションでのアジアの教会の集いで (パリ)



ミッションでのミサ 分かち合い (パリ)



サンシュルピス教会
テゼの祈りの集い (パリ)

表現を尊重するフランスの非宗教性の概念の形成に寄与した」と、共和国の原理を確認した。

これによって、政府はローマ・カトリック教会と一線を画する共和国の姿勢を明確にし、教会には共和国の非宗教性を尊重するよう要請したと見るべきだろう。

さらに、ヨハネ・パウロ二世によるフランス共和国への「内政干渉」として世論の批判を買った出来事として、遺伝子学者であり友人でもあったルジュンヌ教授の墓参を大会期間中に行ったことが挙げられる。

一九九四年に亡くなったルジュンヌ教授は、教皇庁科学アカデミーのメンバーとして、教皇の生命倫理に関する教説に強い影響力を持っていた学者で、人工妊娠中絶に強硬に反対していたことで知られている。

このような人物の賞賛を意味する墓参は、多文化で多様な価値観を生きるフランス社会への挑発であり、ともすればフランス国内の分裂を招きかねない行為である。

というのも、教皇は「私人」として墓参を執り行ったというだろうが、人工妊娠中絶に賛成の立場の人々にすれば、一国の「国家元首」が明らかにフランスの

生命倫理政策に反対の立場を示し、それに干渉することにはかならないと映った。さらに「教会の長」としては、フランスのカトリック全体が教皇の立場に同意し、共和国の生命倫理政策に反対との憶測を呼びか

ない。この人工妊娠中絶法案は一九七四年に可決された当時、文字どおり国論を二分した論争であり、現在でも世論の一致を見たわけでは毛頭ない。その点で、ヨハネ・パウロ二世の墓参はあまりにもフランスの世論を無視した行為と批判されてもしかたない。

日本の教会の対応

最後になるが、日本の教会の対応についてまとめてみたい。結局のところ日本から司教は同行せず、幾つかのグループがそれぞれ自主的に参加しただけであった。したがって、正式に「日本の教会」という立場からの参加ではないともいえよう。

そのために、パリ外国宣教会で催されたアジアの教会の集まりにしても、司教という教会の柱がないために統一した行動をとることが難しく、かえって分裂やセクト主義を露呈した恐れがある。

さらには、司教不在のためにカテキスムを行えず、日本人参加者にしてみれば、ほとんどの行事がヨーロッパ語を中心に行われたため、霊的な体験を深めることが困難であった。

司教の不在に伴う問題点は日本人参加者にかかわるだけではなく、パキスタンのようなイスラム国で、おそらく財政的に厳しい状況にあり、一桁の参加者を送り出すのが精一杯であった国の代表団も司教を同行させていた。一六〇カ国の代表団の中で、一体司教の参加を得られなかった地方教会は幾つあるのだろうか。

他国の参加者から、なぜ日本の司教が来ないのかとの素朴な問いに苦慮したのはわたし一人ではないはずだ。司教の欠席は、その国の教会がワールド・ユース・デイをどのようにとらえているかを最も明確に示している。

教会の明日が若者の双肩にかかっていることは明白である。その若者への宣教があまり重視されなかったために、日本人参加者は百数十人とどまった。司教団が責任をもって呼びかければ、少なくともこの倍の人数を集めることができたのではないか。

日本が宣教国であり、キリスト者の絶対数が少ないという現実を鑑みても、経済的に厳しい「南の国」からの参加者が一定数を占めるなかで、経済的にゆとりのある、少なくともそのように見なされている日本からの参加者が極端に少ないという現実は、日本の教会の国際社会での孤立を招きかねない。と同時に、日本の教会が世界の出来事に無関心であると公言しているようなものである。

格別なナショナルリズムを鼓舞するつもりは毛頭ないが、国際社会に対する日本の参加が極度に低いことにより、果たすべき責任を果たしていないとの無用の批判を招く恐れは十分にある。国内問題も山積しているだろうが、世界へと目を開くことも並行して行いたい。次のワールド・ユース・デイは二〇〇〇年のローマ大会である。そのときわたしたちはなぜ参加するのか、何を世界中の兄弟姉妹にもたらすことができるのか、そして何のためのワールド・ユース・デイか、二十一世紀への架け橋は迫りつつある。

〔おわり〕

〔にしまま・のりゆき〕